

ご縁に感謝し、走り続ける



聞き手

室舘 勲

(株式会社 潮流社)
代表取締役社長

株式会社 吉香 会長
元 全国商工会議所女性会連合会 会長

吉川 稲



吉川 稲氏

——二〇二〇年三月にご著書『女ひとり永田町を走り続けて50年』（中央公論新社）の出版、おめでとうございます。吉川会長の永田町でのご経験が惜しみなく語られており、非常に面白く、とても勉強になりました。出版記念パーティーの開催もおめでとうございます。吉川 ありがとうございます。二〇二〇年秋に出版記念パーティーを開催させていただきました。新型コロナウイルスの感染状況が落

ち着いている時期ではありませんでしたが、人数を会場定員の三分の一よりも減らしての開催とすることをはじめ、万全の対策を講じての開催でした。全国の商工会議所女性会のリーダーたちも集まることができ、非常に良い機会となりました。その他、多くの先生方にご臨席いただき、誠にありがとうございました。いま再び感染が拡大していることは非常に心配に思います。

——ご著書にはゴルバチョフ氏の推薦文もあり、吉川会長の幅広いご人脈に驚きます。

吉川 ソビエト連邦の初代大統領であるゴルバチョフ氏には過去、日本にお招きしてご講演いただいたことがあります。今回は実に二十四年ぶりのコンタクトでしたが、「覚えていたよ！」と快く推薦のコメントをいただきました。

間違いなく自分のコメントであることを証明するために、サインをしている場面を写真に撮って送ってくれました。さすがトップリーダーの配慮はすごいなと感動しました。——永田町を走り続けて五十年。その中で、転換点は、政治の世界に身を置いたことと、「帰国子女に働く場を提供したい」という想いから「(当時) 有限会社 吉香」を立ち上げられたことではないでしょうか。そこに至るまでの経緯をお伺いできますか。

吉川 私は埼玉県の庄屋の家系に末っ子として生まれ、父を早くに亡くして、母親の影響を強く受けて育ちました。母からは「吉川家であることに恥じるような生き方をしてはいけません」「人様に後ろ指を指されるようなことはしてはいけません」「プライドを持つ

て生きなさい」と言われて育ち、私も人様に迷惑を掛けることはしない生き方をしてきたつもりです。

もともとは政治には全く興味のない道を歩んでいました。花嫁修業中だったころ、地元の国会議員の後援会長を務めていた親戚から「講演会を手伝ってくれ」と言われてお手伝いをするようになりました。そこにいらつしやる国会議員や派閥事務所の秘書の方々が、当時、佐藤栄作事務所の秘書を探していた頃で、私を見て「あの人、秘書にいいんじゃないか」と言ってくれました。でも周りから「お嫁にいけないからやめときなさい」とも言われてお断りしていたのです。それでも頻繁にお誘いがあるもので、直接お断りしようと思えば、後の竹下登総理をはじめ

とした、お偉方がズラーツと並んでいまして、とても断れる雰囲気ではない。私も当時若かったので、断りに来たはずが何も言えなくて、結局「とりあえず三か月だけでも」と思っていて、佐藤栄作事務所のお手伝いをするようになりました。ところが水が合ったのか、性に合ったのか、結果的に七年ほど続けることになりました。

——断りきれなかったことが、永田町に足を踏み入れたきっかけだったんですね。

吉川 はい。それが人生を変えるのですから、面白いものです。政治のお手伝いは本当に勉強になりました。週に一回の勉強会に向けた、講師の手配などは楽しかったです。新聞を読んで時代の流れに合わせて講師を選定して。

選挙があれば、選挙のお手伝い。人前で話

すこともやむを得ず経験して。そうしたら「声を通りやすい」と高評価をいただいて、選挙のお手伝いもよく呼んでいただきました。当時は何も知らないままがむしろにやってきました。振り返ると恥ずかしい思いもしますが、良き経験です。それらも全て、ご縁ですね。——そして「吉香」を創立するのですか。

吉川 はい。政界にしばらく身をおいていると、人と人をつなぐことが多くありました。その中でも、せっかく外国語を勉強した方や、帰国子女という経験をもった方が、そのスキルを活かせずにいるもったいない場面も見てきました。そういった方を企業様にご紹介することも個人的におこなっていたのですが、ある時、企業様からも「法人格になってくれた方が助かるな」と言われて。なるほど、と

思っすぐ有限会社を立ち上げて、法人化しました。そうやってスタートしたのが「有限会社 吉香」です。「帰国子女に働く場を提供したい」という私の「おせっかい焼き」からスタートしました。

——目の前の人、周りの人のために一所懸命やっていたら、それが仕事になっていたのですね。

吉川 そうですね。人に恵まれた、出会いに恵まれた人生だったと思います。みなさんが良い方だったから、ご縁に導かれて。一つ、吉香を立ち上げる時に不思議な経験があります。当時出会った、感性が鋭い方に「あなた、三つの神社にお参りしなさい」と言われました。それが巖島神社と、吉香神社と、出雲大社でした。お参りに行くと、行く神社全てで、最



出版記念パーティー
(於 明治記念館)

とらわれて
いるという
か、目先の
ことには優
れていると
いうか。命

初の鳥居をくぐると、雨が降るんです。そしてお参りしている間は土砂降り。で、お参りを終えると小雨になって、一の鳥居を出ると、天気になる。こういったことを経験しました。――必ず雨が降る。

吉川 そうなんです。そして特に最後の出雲大社は印象深く、ご祈祷していると、突如ぐらぐらと揺れを感じたのです。はっと身を構えても、周りは皆、変化がない。どうやら揺れを感じているのは私だけのようでした。それを何度か経験して、その間も、外はバケツを引っくり返したような土砂降り。祈祷を終えて、小雨になった隙に外に出ました。すると、一の鳥居を出る前に、正面の鳥居の真上に真っ赤な太陽が大きく輝いていました。燦々と、いつもより大きく感じる日輪にびっ

くりして、何だこれだと驚きました。後に参拝を勧めてくださった方に報告したところ「土砂降りの雨で、吉川さんの前途を浄化してもらったんだよ。天に歓迎された印なんだよ」と言われました。今でも不思議に思う体験でした。

――それは不思議なご経験でしたね。大先生や大成する方々の共通点として「自分は大きな何かに守られている」という体験をよくおっしゃいますね。それとよく似たことだったのでしょうか。

吉川 面白いもので、そういうことだったんだと思います。

――五十年の間、政界を見てきた中で、感じられた変化などございますか。

吉川 あくまでも私の感覚ですが、当時の政を懸けてでも日本をこうしたい、という熱意を持つている人が少ないように感じますね。ですから、小細工ではなく日本をどうしたいのか。そのために少しでも貢献できるような自分が得意な分野に熱意を持って心血注ぐという情熱が大切だと思います。

もう一つは、有権者である国民も、日本のことを考えていくべきだということです。国民が国のことを考えていけば、政治家に対する批判ばかりではなく、提案・発信して双方のコミュニケーションがとれるはずですよ。今回の新型コロナウイルス問題は特に、世界で初めての経験です。これが正解だということはないと思います。誰が上に立とうと、全分野で一〇〇点の満足を得られる選択肢はありえないのです。上に立つ政治家の多くは、

現在、そのような存在感や情熱を感じる方の比率は少なくなったように思います。形に

に思います。

ことを考えていくべきだということです。国民が国のことを考えていけば、政治家に対する批判ばかりではなく、提案・発信して双方のコミュニケーションがとれるはずですよ。

国民のために汗を流して一生懸命考えてくれています。国民も、批判ばかりではなく、よい良い暮らしに向けて提案し、行動する姿勢も必要だと思います。多くの人の意見を聞きながら、未知の問題にも立ち向かっていく。これは政治家だけの仕事ではなく、日本国民全員が取り組むべきことです。

——おっしゃるとおりです。政治家だけの問題ではないですよ。

吉川 価値観は違う人もいるかもしれないけども、手を取り合う姿勢、協力の気持ちは必要です。でなければ、この未曾有の危機は乗り越えられないと思います。国民が努力をしないで政治家を批判しているだけでは責任転嫁と同じです。自分たちで考えるべきことがあります。

命をかけて全うする。人間にとっても大切な考え方だと思います。いま目の前にある仕事や課題に一所懸命に取り組んで、最高の成果を出す。その使命の一番高いところを目指すことが、人間として大事なことでないでしょうか。

——大きな別の物と比べるのではなくて、今ある最高のものを追求していく。

吉川 私の人生もそのような形でした。目の前のこと、目の前の人のために一所懸命に取り組んできました。それを積み重ねていけば、振り返ると階段をたくさん上がってきたなと思える。階段を一足飛びに十段上に上げられることはないのですから。気がついたらこれだけ上がってきたという感覚です。

礼儀正しく、秩序を守って、恩義を忘れな

極論、自分の人生は自己責任です。政治家が悪い、社長が悪いではないんですよ。最終的には自己責任として、自分がどれだけ受け止められるかということが、人生を決めていくかなと思います。私も、いち経営者として、いち女性として、いち国民として、考えて行動をしていきたいと思っています。

——他人任せではなく、自分で考えて行動することですね。

吉川 物事を判断するために大切なことは、私は自分の感性を磨くことだと思います。物事の本質を見抜く力、それを磨いていくべきです。それらは自然から学べると思っています。小さい木は小さい木の役割、大木には大木の役割がある。いま、この世に生まれた立ち位置をわかって、それを卑下するでもなく、

い、ということを意識してきました。そしてお世話になった先生方に学ばせてもらって、周りの方々に助けていただいて、ここまで走ってこられました。おかげさまで意義深い時間を過ごせたと思います。ご縁に感謝です。

——非常に示唆に富んだお話でした。ありがとうございます。ございました。

■きっかわ・いね■

埼玉県生まれ。一九六七年四月より内閣総理大臣・佐藤栄作事務所に秘書として勤務。七九年六月に吉香を創業、社長に就任。九〇年八月、衆議院議員会館に「外国語センター」開設。九一年七月、世界平和文化交流会を設立、理事長に就任。東京商工会議所議員、東京経営者協会政策委員、全国商工会議所女性会連合会会長、関東・東京商工会議所女性会会長などを歴任。二〇一六年八月、(株)吉香会長に就任。